

# 『篁物語』の総合的研究 (8)

－成果と課題－

中村 一夫 (日本語学・文学科)  
松野 彩 (日本文学・文学科)  
仁藤 智子 (歴史学・史学地理学科)

## 〈経緯と現状〉

実在の人物をモチーフに物語として、後世まで語り継がれている文学作品（虚構物語）のひとつである『篁物語』を取り上げて、日本文学（松野彩）・日本語学（中村一夫）・日本史学（仁藤智子）の視点から共同研究を積み重ねてきた。これら成果の一部は、『国士館人文学』7号（2017年）・8号（2018年）・9号（2019年）・10号（2020年）・11号（2021年）・12号（2022年）・13号（2023年）にて公開している。今回は、今までの研究を振り返り、個々の成果と課題について述べることにしたい。

## 〈題材〉

『篁物語』とは、平安時代に実在した人物である小野篁（802-852）を主人公とした歌物語である。内容は2部構成がとられる。

第1部は、後宮に出仕させるために親に乞われて、異母妹に篁が学問を教授するところから始まる。篁は異母妹への思慕を募らせて、稻荷詣に出かけた異母妹に付きまとった挙句、妊娠させてしまう。やがて、このことに気づいた親によって、二人は引き離される。その悲嘆のなかで異母妹は絶命する。

第2部では、篁は右大臣の娘に求婚する。右大臣の三人の娘のうちで、三の君だけが篁に応え、婚姻する。亡くなった妹の霊魂との遭遇を経て、篁は妻に自らの過去を打ち明け、受け入れられる。

## 〈成立と伝来〉

『篁物語』の成立は未詳で、平安中期から鎌倉室町期まで諸説がある。本共同研究において、文学作品としての語句に基づいた解釈から、平安後期（11世紀末）～平安末期（12世紀末）にその成立を考えるべきではないかという見解が示された。また、『篁物語』第一部の舞台ともなった稻荷詣に関わるエピソードは、「稻荷詣」が盛行し、「稻荷祭」が都市祭礼として成立した11世紀以降と考えられる。これらの文学的かつ歴史学的なアプローチによって、前述した結論が導き出された。

現存する伝本は、江戸時代初期より遡らないとされる書陵部本、彰考館甲本、同乙本（原本焼失、転写本が残る）の三本と、鎌倉時代後期に書写されたと考えられる承空本である。『篁物語』は主に江戸初期に書写された『篁物語』柁形本（彰考館蔵・甲本）によって読まれてきたが、最も書写年代の古い本文の性質を明らかにすべきという観点から、日本語学的な手法によって改めて整理がなされた。その結果、彰考館本群と承空本・書陵部本群の二つのグループに分類することが適当であるという結論に至った。あらたに影印が公開された京都大学文学研究科図書館所蔵本の二本の写本「篁物語」「小野篁集」の調査を経てもなお、先述の結論は揺らぐことはなかった。

また、承空本（西山本）といわれる歌書の一群は、鎌倉末期における京都西山・往生院の僧・承空が行った筆写活動を中心としたものであること、また、その後の承空本の伝来過程についてもおおよそ明らかになった。

#### 〈テキスト及び注釈〉

承空本『篁物語』の本文校訂によるテキスト・自立語と付属語別の語彙表と索引も提供された。また、それにも続く『篁物語』の注釈も継続中である。

#### 〈成果〉

これまでの成果は以下の通りである。

**中村**は、日本語学の立場から、承空本の本文について考えようとしてきた。『篁物語』は主に江戸初期に書写された『篁物語』柁形本（彰考館蔵・甲本）によって読まれてきたが、最も書写年代の古い本文の性質を明らかにすべきとの考えからである。

**2016年度**は主に漢字の使用状況を調査し、『篁物語』の四本の伝本の本文のありようとそれらの相対的な関係性を探り、承空本と書陵部本の近い関係を明確にした。また彰考館本群と承空本・書陵部本群の二つのグループに分類することが適当であることを指摘した。

**2017年度**は、鎌倉時代後期に書写された承空本による校訂本文の作成を試みた。**2018年度**は、承空本の本文を精査するために、前年度にものした校訂本文による自立語の語彙表と総索引の作成を行った。**2019年度**は、前年度に引き続き承空本の本文に使用される付属語の語彙表と総索引の作成に取り組み、承空本の校訂本文および語彙表と総索引が揃うことになった。本文の読みや語彙、文法に関する調査などに役立てたい。

**2021年度**は、あらたに影印が公開された京都大学文学研究科図書館所蔵本の二本の写本「篁物語」「小野篁集」を調査対象に加え、伝本の分類や本文の古態性について考察した。特に2016年度の漢字の使用状況から指摘した彰考館本群

と承空本群の二つの分類は、今回の見直しの作業によって、もはや動かないものになったと思われる。

**2022年度**は、前年度に引き続き、表記から本文の古態性を考察することとした。本文の古態性（あるいは優位性）は本文そのものから導き出すべきという前稿からの方針のもと、漢字表記以外の特徴的な異同部分に着目した。具体的には形容詞連用形のウ音便の表記が、彰考館本群と承空本・書陵部本群の二つのグループで対立することから、もとの語形を維持する本文と平安時代中期以降に盛んになった音便形を多用する本文とでは、書写に対する姿勢の差、さらにいえば、規範性といったものへの意識のありように違いあるのではないだろうか。そしてそれがそのまま本文の表記に反映し、両群での異同となっていると考えている。

**2023年度**でも、過去2年の拙稿に続くものとして、本文の古態性と優位性に関わる表記の問題に取り組んだ。書写の際に表記の揺れとして現れる漢字の使用および音便形を対象として考察を重ねたが、今年度はハ行転呼音に関わる問題を取り上げた。平安時代中期以降に顕著になるハ行転呼音は、『篁物語』『小野篁集』に限らず、和文系の写本で表記の揺れを見せるものである。これが承空本群と彰考館本群ではどのように記述されているかに注目した。両群の異同から本文の性質をうかがう。

**松野**は、中古文学の立場から、注釈書の本文・注釈書を丹念に比較し、新たな本文校訂・解釈の可能性を見いだす研究と同時に、成立時期について検討を行ってきた。

**2016年度**は「角筆」に着目し、その用例から『篁物語』の成立時期を平安後期の11世紀末以降であることを検証した。2017年度は「搔練」に注目して検討を行い、用例調査から平安末期の12世紀末までが妥当であるという結果を得た。したがって、この2年間の研究成果によると、『篁物語』の成立時期は平安後期（11世紀末）～平安末期（12世紀末）の約100年の間になる。この研究成果を踏まえて、2018年度は、「橡の衣」を含む衣装描写の持つ意味について検討した。調査対象は仮名作品にとどまったが、「橡の衣」の用例の分布状況を見ると、上代から中古までであり、最も新しい例は『栄花物語』（12世紀初頭までに成立）であった。この結果により、2016年度・2017年度の2年間の研究で検討してきた成立時期の推定が誤っていないことが確かめられた。

**2019年度**は、第一部末の「比叡の三昧堂」という部分の本文異同に着目し、史料の調査から、「比叡の三昧堂」という表現が史実に忠実であり、「比叡の三昧堂」という本文を採択することが妥当であると結論づけている。なお、2017年度・2018年度と衣装についての描写を扱ったが、**2020年度**も『篁物語』の数少ない衣装表現の1つである「綾の搔練」について調査を行い、「綾」と「搔練」が近

接した箇所に使われている部分が、『篁物語』以外では『うつほ物語』にしか見られないことが確認された。そして、『うつほ物語』で「綾の搔練」を着用している人々の身分や富裕さと比較して、『篁物語』の異母妹が「綾の搔練」を着用していることが不自然であることを指摘し、そこから成立年代や作者の人物像について推定する根拠の一助となる可能性があると考えた。

2021年度は、所属大学において「科研費申請再チャレンジ助成」（前年度の科研費で非採択A判定のものから選抜）という予算がついたことから、研究報告書として『篁物語』の総合的研究 2016-2021」としてまとめて製本し、関連分野の研究者など、関係諸所に送付した。

また、承空本による本文での注釈と現代語訳はこれまでないことから、作成作業に着手し、冒頭部分の注釈・現代語訳の作成を行い、「承空本『小野篁集』注釈の試み（1）—篁と異母妹の出会い—」として『国士館人文学』（第12号〔通巻54号〕、2022年3月）に掲載した。

2022年度は、2021年度に続く場面、すなわち、「篁と異母妹との出会いの後半」と、「師走の月夜の場面」について、承空本による本文での注釈・現代語訳を作成した。この作業の過程で、解釈に相違が出るような本文異同は3例あり、それら3例は、すべて、承空本と宮内庁書陵部蔵本の本文、水府明徳会彰考館蔵甲本と同・乙本の本文がそれぞれ一致していた。この3例のうち1例は承空本と宮内庁書陵部蔵本の本文での解釈は難しいが、残りの2例はそのままで解釈が可能であった。つまり、2022年度に注釈を行った範囲内では、承空本と宮内庁書陵部蔵本のほうが、水府明徳会彰考館蔵甲本と同・乙本よりもすぐれた本文であるということはいえなかった。

2023年度は、2022年度に続く「漢籍教授に身が入らない篁の場面」について、承空本による本文での注釈・現代語訳を作成した。この場面で解釈に相違が出るような本文異同は4例で、そのうち3例は承空本と宮内庁書陵部蔵本の本文、水府明徳会彰考館蔵甲本と同・乙本の本文がそれぞれほぼ一致していた。残りの1例に関しては宮内庁書陵部蔵本だけが孤立し、残りの3本は一致しているが、どちらの本文でもそのままでは解釈不可能であり、承空本で解釈をするためには本文の校訂を余儀なくされた。なお、2023年度に検討した範囲からも、承空本が他の写本に比べてすぐれていると考えられる根拠は見いだせなかった。

今後は、承空本の位置づけを考える上で、より広範囲にわたって本文の相違を分析する必要があると考える。『国士館人文学』での連載は今年度までだが、次年度は掲載誌を『國文學論輯』（国士館大学国文学会編）に移し、研究成果を継続して発表していく予定である。

仁藤は、歴史学の立場から、(1) 小野篁の実像や彼の生きた時代背景、また (2)

『篁物語』が成立・伝来してきた過程について明らかにすることを課題としている。

### (1) 実在の人物としての小野篁とその時代の究明

2016年度は、諸史料に散見する小野篁関係記事を整理し、承和の遣唐使乗船拒否事件や僧善愷訴訟事件など数多くのエピソードの中から、平安時代の学識豊かな官人として、二人の東宮・恒貞親王と道康親王に学士として仕えた篁の姿を明らかにした。恒貞親王は淳和皇子で、842年の承和の変によって廢太子された。代わって皇太子となったのが仁明皇子の道康親王である。政変を境に、皇太子位を替わった二人の東宮学士に乞われたことは、政局に左右されない篁の学識の高さを物語っている。小野篁に関連する史料は、正史篇として2019年度に集成して解説をつけた。

2017年度は、平安期に人々を魅了した社寺参詣が物語に与えた影響を注視しながら、『篁物語』の舞台に「稻荷詣」が選ばれたこととその時代性について考察した。稻荷(神)社は、9世紀半ばに突如史料に現れ、その後、朝廷の崇拜を受けるようになる。平安初期から中期における稻荷神については、別稿(仁藤「平安時代の稻荷神」伏見稻荷大社編『朱』65号、2022年)も参照されたい。人々の参詣の対象となるのは11世紀以降で、平安京に住む都市民の祭礼として稻荷祭が挙行されるようになる。このような歴史的背景から、『篁物語』の稻荷詣に関わるエピソードの成立時期は、11世紀以降ということができ、松野の成立年代に関する研究成果と矛盾しないことを確認した。

### (2) 承空本(西山本に含まれる)の成立と伝来過程の解明

2018年度は、鎌倉末に京都西山往生院で行われた、承空を中心とする歌書の筆写活動を整理し、歌書群(承空本を含む西山本)の全貌を提示した。承空は、有力御家人宇都宮頼綱の孫で、藤原(二条)為氏とは従兄弟にあたり、その文学的素地は、宇都宮歌壇と鎌倉歌壇・京都歌壇との交流が背景となる。承空本を含む西山本とは、鎌倉後期に、浄土宗の西山往生院において、藤原資経等から借用して筆写した歌書群であると考えられる。これら西山本は、承空の死を契機に二条家へ寄進され、その後に冷泉家に移管されたと想定される。中村が以前から指摘しているように、承空本あるいは承空本と同系統の写本を江戸時代に書写したものが書陵部本である見通しも立った。

2020年度は、西山本の表紙に記された花押と奥書を手掛かりに、西山本の整理を進めた。承空が直接筆写に関わった本には、すべてに承空の花押が書かれていたと考えられ、西山本の中から承空本として切り分けることができることを指摘した。また、その筆写活動がなされた場として西山・往生院と京中の「室町宿所」があり、一部の歌書の筆写順が判明することが明らかになった。それによれば、筆写期間は、永仁4(1296)年から正安元(1299)年末に集中している。

2021年度は、西山本(承空本を含む)の紙背文書の検討を開始した。狭義の

承空本の紙背文書は254通余り、西山本全体では426通余を数える。両者の紙背文書は密接にかかわっており、狭義の承空本を含めて西山本として扱うことの妥当性を感じた。承空の師である栖空の示寂後の仏事関係文書から、鎌倉末期における西山往生院の一端が垣間見えることを、また『小野篁集』紙背文書となった7紙6通の文書から、承空を中心とする人的ネットワークの一部が判明することを紹介した。紙背文書の年代から、歌書が筆写された時期も推定できることも明らかになった。さらに、「室町宿所」の可能性を模索した。

2022年度は、藤原定家の子である為家以降の御子左家の三川（二条家・京極家・冷泉家）への分裂が、家業としての歌学の継承（勅撰和歌集の選者という地位）の争いによるものであるという先学の指摘を考慮して、歌書群の形成と相伝を考察した。勅撰和歌集の編纂が王権の権力表象の発露でもあったことから、当該期の皇統の分裂による両統迭立が引き起こす変動的な政局と、中世藤原家における歌学の権威と所領、歌書群の伝領をめぐる抗争が連動するようになったと考えられる。対立のもっとも激化した時期—永仁年間—に、承空らによる筆写活動があったことは重要である。西山本（承空本を含む）の歌書群が二条家を経て、冷泉家に伝来することになったことや、反御子左家の一つである真観などによる三井寺系歌書群も応猷への譲渡という形で、室町期に冷泉家に入ったことも看過できない。

2023年度は、今までの成果をまとめつつ、『篁物語』の成立と篁にかかわる伝承の広がりについて愚見を述べる。『篁物語』成立年代の特定と他の作品との影響関係の解明は課題の一つであった。特に第2部のモチーフとなる篁の求婚書に着目すると、『篁物語』だけでなく『本朝文粹』・『江談抄』・『十訓抄』・『三国伝記』などの創作との関係性が想定できた（仁藤「史実と物語のあいだ—平安時代における文芸創作の空間としての「篁物語」と「伴大納言絵巻—」『歴史評論』841号、2020年）。そこで、改めて篁をめぐる虚構と実像について再検討を加える。

### 〈共同研究としての成果〉

本共同研究の成果を簡潔に整理したい。

#### (1) 『篁物語』の成立年代

実在する小野篁とそれをモチーフにした虚構文学としての『篁物語』の成立年代について、11世紀後半から12世紀後半に求めるという新たな知見を提示することができた。

#### (2) 『篁物語』の伝本（写本）系統の分析

『篁物語』の伝本は、承空本を含む西山本（カタカナ）と書陵部本（ひらがな）における表記や語種の解析、かつ語積から、大きく二系統に分類できることと、新出の写本もその二系統に収まることも明らかになった。

### (3) 筆写活動による西山本（承空本）の成立と伝来過程

鎌倉後期における京都・西山の書写活動（西山本）は、若干先行する藤原資経による書写活動（資経本）とかかわっていたことは明らかである。また、西山本の紙背文書からは、永仁年間を中心とする承空らが暮らす西山往生院の生態が伺える。当該期の社会情勢の中に西山本歌書とその紙背文書を還元することで、承空らを歌書の筆写活動に駆り立てた歴史的な状況や西山往生院における重層的な人的ネットワークを解明することが可能である。

本号をもって9年間にわたる共同研究『篁物語』の総合的研究は、一区切りとしたい。